

メドハースト雑感 ——写真への添え書き

大原信一

メドハーストについて何か書き添えたいと思いながら、何を書いたらよいか、正直な話、アレコレとまどっていました。

わたしは長年、語学畑の仕事ばかりやっていたので、視野に入ってくるのは、その方面の事ばかり、明治維新直後のころこの人は「字典学者」として日本でも有名であったといったような伝聞は承知していましたが、“CHINA”という大著もあるシナロジストで、数種類の辞典をはじめ福建語などの研究書もあり、「英文三字経」や「書経」の訳があるとか。

わたしはここ数年、「江南製造局」の訳書を1、2冊取り上げていましたが、最近それを生み出すのに影響があった「上海の翻訳環境」、その中心としての「墨海書館」にたどりつき、ここでやっとメドハースト先生にお会いできた次第です。

もし本でも出す機会があれば、それに使いたいと思い、記念にするにふさわしいものをさがしていましたが、ありました。この写真です。大著“CHINA”の色刷りの口絵です。この絵は当時の「翻訳」風景を如実に描いていると思います。

もう一つ、私はこの絵を見たトタンに荷風の書いた「十九の秋」という随筆を思い浮かべました。(岩波文庫、「荷風随筆集」



Mr. Medhurst with Choo-Tih-Lang attended
by a Malay boy. Painted by G. Baxter

(下巻、甲戌十年、1934年10月の作)。30余年まえの上海旅行の印象を書いた文章です。明治30年の9月、十九歳の荷風が、官を辞し日本郵船支店長として上海に住む父を訪れた時の思い出です。

「むかし私が目撃した色彩の美はもはや街路の上には存在しないのかも知れない」と思いながら、当時の「男の服装の美なる事はむしろ女に優っているを羨ましく思った」と記しています。「当時わたくしは若い美貌の支那人が、^{おんげ}辮髪^{おんげ}の先に長い^{おんげ}総^{おんげ}のついた絹糸を編込んで、歩くたびにその総の先が^{おんげ}繻子の靴の真白な^{おんげ}踵^{おんげ}に触れて動くようにしているのを見て、いかにも優美^{おんげ}纖巧^{おんげ}なる風俗だと思った。」

カラー写真には、荷風が感じとった「色彩の美」が十分にあらわされていないのが物足りないのですが、それでも男の服装の「威厳ある美しさ」はとってもらえるだろうと思います。

(2002年3月19日)

附記：

大原先生より、メドハーストの翻訳風景を写しているカラー写真が送られたきたのは2月上旬のことであった。メドハーストの著 *China, its state and prospects*, London, 1838 にある写真を先生が写真屋に依頼して、鮮やかなカラー写真に甦らせたものである。『或問』第4号に転載するにあたり、先生にそれに合わせて何書いていただけないかとお願ひしたら、程なく上記の一文を送ってくださった。単色刷りの小誌はカラー写真の雰囲気伝えることができないのは残念であるが、当時の翻訳現場の様子を少しでも垣間見ていただければ幸いである。大原先生のご健康とご健筆を心からお祈り申し上げます。

なお、余白を埋めるのに若きメドハースト氏の肖像画を用いた。

沈国威



Walter Henry Medhurst,
drawn by W. T. Strutt